

に集ったわれわれすべてに要求されたことでもあった。二年間の経験を共有しながら、考えをぶつけ合い、喜怒哀楽を分かち合った。根底には、成熟した個人主義があったように思う。私には私の考えがあり、それを主張する権利を持っているし、私という存在は尊重され、承認されるべきである。そうであれば、私はあなたの考えに耳を傾け、それを深く理解しようと努め、あなたという存在を尊重し、承認しなければならぬ。そんな姿勢を、われわれは共有していた。二年間で私が彼らと築いた友情はとても深いものとなった。そして、彼らとのかかわりは、私の考え方や他者との接し方を根本から変えた。

理想と現実と

ところで、私がアドリアティック・カレッジにいた九〇年代の初頭には、東西冷戦構造の融解が欧州に変革の風を吹かせており、カレッジに多数在籍していたロシア・東欧出身者たちは、母国の激動に希望と不安を覚えていた。在学中には湾岸戦争も勃発した。一時は、どこが爆撃され何名が死亡した、という情報が連日掲示板に貼り出され、国際電話で家族の安否を確かめることが、テルアビブに実家のある友人の日課となった。国境を越えて友情を深め、平和を願うと言いながら、

友人たちの母国では革命や内戦で血が流れ、スカッド・ミサイルが街を破壊していたのである。米国とそれに追随する諸国の姿勢が批判されたり、支持されたりするなかで、私の祖国は、まるで当事者意識に欠けたまま、資金だけを出していた(もちろん、軍隊を出せばいいというわけでもない)。いかなる時期のUWCも美しい無菌室ではないが、当時は特に、素朴な理想主義への埋没を許さない状況があったように思う。政治権力の横暴や「民主主義」の擬制性、圧倒的な貧富の格差の存在……個々人の意思や友情だけでは克服できない構造的問題の存在を、鋭く突きつけられた二年間でもあった。

経験を糧に未来へ

私は現在、国内の大学で、財政学という学問に取り組みつつ、若者たちと日々向き合っている。フィリピンの民主主義と財政の問題を考察してきたが、最近では日本の問題にも分析の目を向けている。

UWCが私に与えてくれたことを、研究・教育を通じて、いかに社会に還元するか。私にUWCへの道を開いてくれた方々に感謝しつつ、あのころ抱いていた挑戦心を忘れずに、理想と現実を架橋するような、クリエイティブな研究を進めていきたいと思っている。

中央公論 9月号 発売中!

特別定価 900円(税込)

〒104-8320 東京・京橋2-8-7 中央公論新社
TEL 03-3563-1431

特集

超・医療格差が奪う未来

国民皆保険が壊れた日 久坂部 羊 | 医療保険一元化へ
徹底討論 市場か、政府か 竹中平蔵×山口二郎 | 政治的決断を 村上正泰

特集

政権交代前夜

—— 民主党の実力を問う 上杉 隆 ほか

特集

マイケル・ジャクソン、栄光と没落

速水健朗 | 「戦後」を再考する 井上寿一 / 片岡義男 ほか

UWCは私の原点

一九九二年UWCアドリアティック・カレッジ(イタリア)卒。東京市政調査会研究員、聖学院大学政治経済学部専任講師、同准教授を経て、二〇〇九年より現職。

新潟県立大学国際地域学部准教授

高端正幸

たかはし まさゆき



UWCを卒業してから、はや一七年が過ぎた。いつの間にか、卒業後の歳月がこれまでの私の人生のおよそ半分を占めるようになってきた。

狭い日本を飛び出して、違う世界を体験したい―私は、小学生の頃からそのようなことを考える風変わりな子どもだった。もし私の息子がそんなことを言い出したら、どれだけ今の生活に不満を覚えているのかと心配になるかもしれない。それはさておき、小さな小さな私の夢のちに叶えてくれたのが、UWCであった。

👉デュイノという多文化社会

UWCアドリアティック・カレッジは、イタリア北東部、旧ユーゴスラビアのスロベニアとの国境にほど近い、デュイノ(Duino)という村にある。穏やかなアドリア海を崖の下にのぞむ、素朴で小さな村である。中心の広

場近くに校舎と図書館があり、六〇カ国もの国々から来た同世代の若者が、村内に散在する大小さまざまな寮で共同生活を送る。

デュイノはスロベニア人マイノリティが多く住む村で、道路標識にはイタリア語とスロベニア語の両方が書かれており、スロベニア語スピーカーのための小学校もある。この辺りはかつてオーストリア・ハンガリー帝国の領土で、第一次大戦時には激戦地となった。ヘミングウェイの『武器よさらば』に登場するゴリーツィアという街は、デュイノから内陸へ少し入ったところにある。カレッジのあるデュイノという村そのものが、小さな多文化社会なのであった。

👉表現し、認めあうコミュニティ

世界中から選ばれた若者が、国際平和の促進というUWCの高邁な理想のもとに集まる、とても特別な学校……これが、想像力の乏し

●(社)ユナイテッド・ワールド・カレッジ(UWC)日本協会は、世界各国から派遣されてくる生徒たちとの教育体験の共有により、国際感覚豊かな人材を養成するという理念を掲げるUWCの日本委員会として、毎年一〇名前後の高校二年生を世界各地にあるUWC傘下の高校に派遣し、すでに四二四名の卒業生を輩出している。

い私が事前に理想化していたUWCのイメージだったが、実際に身を投じてみれば、それはとてつもなく人間臭く、刺激的な場所であった。何しろ、異なるバックグラウンド、多様な価値観を持つ一〇代後半の若者たちが共同生活を送るのである。ごく平凡な、英語もおぼつかない少年だった私にとって、そこでのサバイバルは大いなるチャレンジであった。日本で当たり前に通じていた常識はまるで力を持たないので、何事もはつきり言葉や態度で表現しなくてはならない。多分、私にとってはそれがUWCでの二年間のエッセンスであった。自分は何者で、何がしたいのか。日本とは、日本人とは何なのか。自分はあなたとどんな関係を築き、何を分かち合いたいか。それらをはつきり表現するには、まず私が私自身の内面を、表現可能な具体的レベルで理解する必要がある。そして、日本の学校社会であれば「浮いてしまう」くらいに、それをストレートに表現しなければならぬ。気後れしている暇などなかった。もちろん、それは私だけでなく、あの場所